

■みんなと一緒に演奏する権利

北九州市人権推進センターがお送りする「明日への伝言板」です。

今日は、北九州市が平成24年度に募集した
人権作文の入選作品の中にあったお話を紹介します。

三十年ほど前、教員として勤務していた幼稚園に、
知的障害のあるAくんが在籍していた。
Aくんは、自力歩行はできるが、言葉はなく、
口を開けていつもニコニコしていた。
子どもたちは、Aくんが何かできれば手をたたいて喜び、
できないことはこぞって手伝い、
彼と共に過ごす中で心も大きく育っていった。

ある日、Aくんの担任からこんな話を聞かされた。
生活発表会でAくんの けんばん 鍵盤ハーモニカに細工をして、
音が出ないようにするのだという。
間違った音を鳴らされると曲が台無しだから、と。
生活発表会は園の一大イベントで、保護者の期待も高い。
合同演奏を成功させたい気持ちは分かるが、あんまりだ。
でも、私はどうすればよいか分からず、意見する勇気もなかった。

合同演奏は無事に披露され、大きな拍手を浴びた。
もしかしたらAくんは事実を知っていて、
私たちの心の未熟さを黙って受け入れてくれたのではないか…。
そう思ったのは、その後、私自身が知的障害のある娘の母となったからだ。

娘を育てた時代は、社会も教育現場も、
少しずつ障害者の人権が重視されるようになっていた。

娘が小学六年生のとき、運動会^{こてき}で鼓笛パレードがあった。

娘は、みんなと同じように歩きながら鍵盤ハーモニカを吹くのは難しい。

だからといって、障害を理由に娘がみんなの鼓笛パレードを
台無しにするようなことがあってはならない。

そこで私は先生に相談し、娘にも吹けるようにオリジナルの譜面を作り直し、
娘には責任を持って必ず吹くように教えた。

楽器を肩から下げる器具も作った。

こうして娘は無事に自分の役割を果たした。

娘は自分の実力に合った権利を行使できたと思っている。

権利を行使できると娘は自信が持てた。

そして、権利を行使するためには少しの努力も必要なのだと分かった。

いかがでしたか。

作者は最後に、Aくんへの思いをこう綴^{つづ}っています。

「Aくん、あのときは何もできずにごめんね。大切なことを教えてくれてありがとう。」

それでは、また。